

キリスト教と無の立場

名木田 薫

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2000年9月30日 受理)

西谷啓治によるエックハルト理解を参照しつつこの問題を考察したい。

被造物に対する神は神自身ではなく、表象された神であり、そういう神のなくなることは実在の神に触れることで、そこでは生きた神と生きた自己とが一つの働きに現れると言う(第7巻232頁)。「私の眼と神の眼とは一つ」、「神は私のうちにおいて私よりも私に近い」などはこういうことだと言う(同上)。表象の神と生きた神とを分けて前者を否定しているが、救済史的信仰では双方生きていると言えよう。前者の否定ということは啓示の神、他者たる神の否定を意味しているであろう。肉のからだで生きている人間にとって前者の否定を意味する後者の神が真に本当の神と言ってよいのかと思う。ただ生きた神と生きた自己とが一つの働きに現れるということはキリスト信仰にもそのまま当てはまるであろう。また子がなお父の家にある場合の一は二を潜在せしめる即自的一だが、顕になった二においての能作における一において絶対の一が現成すると言う(第7巻55頁)。キリスト信仰とは正にこういうものではないのかと思う。キリスト者はそのうちにキリストが生きている存在であるから。キリストのからだとしての有機的の一体の一環を担っているのだから正に能作において一と言えよう。個々の別個の存在として顕になった二と言えよう。さらに、「絶対に二なるものが主体的に一なるが故に絶対に一になり得るという立場である。」(第7巻34頁)と言う。これは神秘主義であって、キリスト信仰ではない、たとえ能作的合一であって「見る」立場ではないとはいえ。聖なるものと罪あるものが今すでに一ということは不可能である。終末においてさえ神と人とは一にはなっていないのである。神はそもそも能作において全存在として出尽くしているのか。ところで絶対に二なるものとはどういうことであろうか。存在として神は人とは別個のものであるほかない。となると対象として考えることは不可欠、不可避である。人の内面に取り込まれてしまうと、それは絶対の他という性格を失ってしまう。人との関係で絶対の一とはなり得ないところにこそ絶対の他としての神の存在があり得ると言えるのである。主体的に一なるがゆえに絶対の二が絶対の一になるというのは禪の立場で人が主体的に無に至るということに応じたエックハルト理解なのであろう。こういう絶対の純粹能作の立場には禪での超仏超祖と共通のモチーフが見られると言う(第7巻73頁)。このことは「もし私がなかったならば神もなかったであろう」という言葉に端的に出ていると言う(第7巻73頁)。この

エックハルトの言葉は実存的な意味ではキリスト信仰にもそのまま当てはまると言えよう。外の物から受け取られた像と一つになることが直ちに眼の内から眼に固有な作用が発現してくることにほかならぬとしている（第7巻21頁）。このことも実存的信仰の状況を表していると言えよう。神が人に対してのように別個の存在であるということなら、それではまだ神は人に対して相対的存在に過ぎないということであろう。絶対であれば相対的対立を超えているのだから人とも一になり得るようなものでなくてはならないということであろう。しかしキリスト信仰から見るとそういう絶対は絶対ではない。なぜなら相対的存在と一になり得るのだからである。絶対とか相対とかという言葉の内容が禅とキリスト信仰とでは異なっているのだと思う。

絶対の一ということについては、ノエシ的な一としての絶対の自、主主合一ということが言われている（第7巻52頁）。啓示の神というものとノエシ的一に絶対を見ることとは相容れないであろう。啓示としてはどうしてもノエマとしての、存在としての神が前提である。無ということを究極に考えるのでノエシ的一を究極と考え得るのである。神についてまで無という根底を考えてよいのであろうか。被造物と同じようにそう考え得るのか。そういう神はもはや神に値しないのではないのか。創造者と被造物とはどこかが異なっているはずである。異ならないのなら神も後者の一つとなるであろう。いわゆる絶対の他は他ではないというのであろうが、自とか他とか言い得るのはそれぞれが固有な存在を持っていればこそである。ノエシだけならもはや固有な存在はないので自とか他とかは問題にはならないであろう。そういう状況で自とか他とか言っても無意味であろう。

次に、「空にして能作する」について、「『空にして』とは神性の無において自己自身を滅する空却であり、内的な業である。」（第7巻99頁）と言う。たとえどんなに人の心の状態が変わっても、そこにおいて人の内面と神性とが二でなくて一であるという考えは聖書の信仰とは異なっているであろう。一ということも言えぬほど一であるということであればなおのことであろう。どういう仕方においてであれ内面においてであれ、外的にであれ人が絶対的存在である神と一という考えは聖書に反している。神と一と考えると人についての罪ということは希薄とならざるを得ないであろう。罪ある限り人は神と一にはなれないのである。「意志は神が意志するもの以外何ものをも意志できない」（エックハルトの引用第7巻102頁）と言う。そうすると人の意志は自由に働きながら全く神の意志に合致しているであろう。罪のかけらさえもないのであろうか。久松禅学が超個に偏しているという批判を受けるがそれと同じことが言えはしないのか。神の意志と全く一致という以上まず神の意志の内容を知らねばならないが、それを知っていると思うこと自体が問題なのだということである。聖書では神と人とは断絶していることが大前提である。人は神を直接には知り得ないのである。人は死ぬ以上罪の汚れに染まっている。もし仮にエックハルトが不死であるのなら神を直接知る可能性があったことであろう。

「私がそこにおいて神を見る眼はそこにおいて神が私を見る眼と同じ眼である。」（エッ

クハルト D. W. Bd. 1 478頁)。この引用文の前で“見る眼とその眼で見られるものが同じ”といった後でこのように言っている。こういう考えの中での神とは他者なる神とは言い得ないであろう。なぜなら神を見る者は死ぬほかないと告げられている（出エジプト 19:20) のであるから。神自体が人の内面一単なる内面ではないとしても一に取り込まれるような性格のものになっているのではないのか。他に対してその存在を与えるごとき神は人とは別個の存在であるほかないであろう。

神と魂との親近性については、「神と魂との間の近さは両者のいかなる区別も知らない。(中略) 魂はその存在を直接に神から受け取る。ゆえに神は魂に、魂が魂に近い以上に近い。ゆえに神は魂の根底において神の全神性とともにある。」(エックハルト D. W. Bd. 1 467頁)。また神と魂とが一つにされるべきであることについて、「いかなる不同も存しないところでは必然的に一つたること (Eines) があらねばならない。(中略) 我々は子は父に同等 (gleich) であるのではないと言う、むしろ子はその同等性 (die Gleichheit) である。子は父と一つである。」(エックハルト D. W. Bd. 2 700頁)。神と魂とはかくて同じものということになるであろう。類似性があるというようなことではないのである。こういう考えはヨーロッパ中世の統一文化の時代を背景にしてこそ言い得る、考え得ることであろう。聖書、特に旧約聖書を背景にしては言い得ないことであろう。ただ神に関して言えば、「同等性 (Gleichheit) ということは神においては存在しないことである。(中略) 永遠性においてはただ一であることのみ存している。同等であるということは存在しない」(エックハルト D. W. Bd. 1 481頁)。同等であるということは二が前提となるからであろう。両者を比較して同等という判断を下すという結果になるからであろう。もともと一であればそういうことはない。二ということはないのであるからである。確かにそうであろう。同様な事柄としてキリスト信仰においては、キリストにおいて全てが総括されるということが存しているのである。

このような一ということについては、西谷以外にも例えば一個の純一なる一化の全現成としている”。エックハルトの場合にはキリスト教の世界の中でのことなので神ということがどこまでいっても出てきている。そこで一ということが人格的な次元へと展開してゆきうるのだと思う。禅のように元来神というものの欠けている世界でそういうことが果たして可能であろうか。西谷は神ということについてその内容が日本と中国とで違うのではないかと、西洋に限ってみても *theos, deus*, 近代語の *God* などでもともと同じか否かさえ問題になるということに触れている (第25巻425頁以下)。このことはエックハルトにおいて神の眼と自己の眼とが一つというような考えにおいて“神”というものをどのように考えているかを反省するのに大いに役立つのではないのか。つまりエックハルトでの神は聖書での神とは違うのではないのかという問題である。しかも日本人がエックハルトを高く評価するとき、その神というものについて日本人の神観念として解しているところがあるのではないのかということである。その点の反省に当たってこの個所での西谷の言葉は

大いに参照に値すると思う。

こういう一についてさらに、プレーガーの無理解について『私の眼と羊の眼』との合一が超有的である如く、神の眼と霊の眼との合一も超有的なることを解しない。(中略) この全く別な Wesen をも超越的に一つにする如き彼らの Werk の一が問題なのである。』(第7巻40頁以下) と言う。私の眼と羊の眼とは私の眼と神の眼とも考えられる。Wesen が違っていても超越的に一つにするのである。しかし神と人については Wesen が違うとたとえ超越的とはいえ一にすることは不可能である。もしそういうことが可能なのであればイエス・キリストにおける啓示は不要となるであろう。聖なる神と罪ある人という Wesen の相違は人の側からのいかなる方策も超え得ないことなのである。人と羊とであればともに自然的存在、被造物でありこういう問題は生じない。神と人についての問題において人と羊との関係が例えとして出されるところに既に神と人との間の断絶を明確に意識していない点が出ていと言えよう。創造者と被造物との関係を被造物同士の関係にたとえることは不可能であろう。

主主合一については、エックハルト自身「私の眼は羊の眼と(中略)より多くの共通性を持っている、私の眼が私の耳と共通性を持つ以上に。(中略)それは羊の眼が私の眼と同じ活動を行使するからである。」(エックハルト D. W. Bd. 2 712頁以下) と言う。つまり同じ活動ということで能作の一を言いたいのであろう。Wesen の違いよりも作用の違いの方に重点があるようである。こういう考えは神と人との本質的相違よりも能作における一の重視という考えに通じているのであろう。西谷でも質料なしと仮定された木材と眼との関係として取り上げられている(第7巻36頁以下)。神というものが精神的と考えた場合の木材に当たるのであり、霊が眼に当たるのであろう。かくて神が精神的存在であって視覚作用において眼と主主合一するような性格のものであれば、啓示というものは不要であろう。「わたしは、有って有る者」(出エジプト3:14) というときの「有る」というのは sein, werden, wirken という三つの意味を持っているのであり、神の側が一方向的に能作的と言えよう。神は人の見ることのできない存在である。かくてこういうたえはふさわしくないのである。二つの Wesen における、例えばものとそれを見る眼との一よりも精神的なものにおけるそういう関係における一のほうがより高い一というような考え方は可視的世界よりも精神的世界を重く見ることを前提としているが、これは聖書の考え方とは異なっているのである。

こういう考えでは物質的世界は軽い意味しか持たなくなるであろう。「魂が神を世界なしで認識し得るならば世界は魂のために作られはしなかったであろう。」(エックハルト D. W. Bd. 2 661頁) と言われている。しかし聖書によれば世界は神の栄光を現すために創られていると言える。魂中心に考えてしまうと人間中心的になってしまうであろう。神秘主義は元来そういうものなのでそうなっても何ら不思議ではないのであるが。「神みずからが義となり」(ローマ3, 26) というように義認論においてさえも神中心的なのであ

る。こういう観点の欠如と終末論の欠如とが関連しているのである。

次に、人間における徹底した自己否定について。「物が再び絶対の固有性に生きてくる
ところ、絶対否定が絶対否定でなくなるところに真の絶対否定が現成する。」(第7巻50
頁)と言う。エックハルトの神秘主義に関連して言われていることだが、これは確かにそ
うであろう。現実的に考えられていると言ってもよいのであろうか。ただ問題は世界の創
造者としての神という観念は禪にはないので同じ現実的という言葉を使ってもその内容が
異なりはしないのかということである。それはともかくとして絶対否定は絶対肯定に転ず
るということを言いたいのであろう。神の本質といってもそれが神の本質である限り对被
造物的相対性を残している。そこでそういう本質との合一では満足しないのであろう。こ
ういうところでは「脱自とは、一方では神との全き『一』に入り、他方では『神』の物
を全く離れて再び人間に帰るといふ、神と人との間の矛盾をそのままに同一にした如きも
のである。」(第6巻30頁以下)と言われる。神は人間に対してここで言うような脱自の徹
底を要求しているのであろうか。もしそうでないのなら人が自分の考えでそうしているこ
とになるからである。神との全き一に入ると言うが、そこで言う神とはイエス・キリスト
において啓示された神と言えるのであろうか。「恩寵による救済といわれるもののうち
にも潜みうる最後の自己中心主義」(同上30頁以下)として信仰の立場を批判しているが、
これはもはや人間的次元での“自己”中心主義とは言えないであろうと思う。そこをさら
に超えようとするのはかえって“脱自”中心主義に陥ることになるのではないのかと思
う。脱自そのものがいわば神格化されているのではないのか。だからこそそこに神が現わ
れ神との全き「一」になると考えるのではないのか。ところでパウロ的信仰では神による
創造の世界における救済史のインストルメントになっているのである。西谷も聖霊(人格
的非人格性)との関連でパウロを取り上げてはいるが、パウロでは脱自と同時にインスト
ルメントになっているのである。確かに脱自なしにインストルメントにはなれない。しか
し逆もまた真である。ただキリストを信ずるという面が前面に出てくるので脱自という面
はいわば暗がりの中にあるままなのである。脱自を純粹に取り出そうとすることは人間的
な業であって不要なことであろう。

「神の本性は神が各々の良き魂に自らを与えるということである。そして魂の本性は魂
が神を取り上げるということである。(中略)そういう点において魂は神の像を思い、神
に同等である。」(エックハルト D. W. Bd. 1 492頁)と言う。神にしる魂にしる自己と同じ
ものを受け入れるということであろう。こういうことは何事につけ一般的に言いうこと
であろう。こういう面につき、「霊には神のあらゆる内面が開かれ、霊は神との *persoenlich*
な交わりに止まらずして、神の内面へ、神的自然から神的本質へ透入するのである。」(第
7巻48頁)と言う。また「裸のままの神に」とは神が自己自身をあまねく与えると語られ
たことと同じ意味だとしている(第7巻16頁)。キリスト信仰では神というものを人は生

まれながらにして見うるものではないということが基本である。神を見る者は死ぬのである（出エジプト19：20）。そもそも神が人に自己全体を与えるなどということを考えること自体が奇妙である。神の霊とかキリストの霊とかと人の霊とかがこういう関係に入るといふのなら理解しうるであろう。しかるにエックハルトでは神が直接出てきている。最初から聖書の神理解から逸脱していると言えよう。少なくとも啓示の神ではないであろう。そういう意味では我々日本人一般の抱いている神観念と共通な要素があるのであろう。パウロにキリストが現れたといっても、キリストはイエスとして地上に生きていた人であった。その限り単に内面的に啓示されたのではない。内外に啓示されることが啓示の不可欠の要件であろう。内面的に色々の変化が生じてもそういうことには対して大きな意味はないのであろう。神の創造した世界の中にどういふ変化が生ずるかということに関わらない場合には、なぜなら人はしよせん罪を完全に脱することは不可能であるからである。

このような神と人とのいわば相互透入のためには、「我々がいつか神の根底の中へ、そして神の最内奥へ入って行くべきならば、純粋な謙遜において我々自身の根底の中へそして我々の最内奥へ入ってゆかねばならない。」（エックハルト D. W. Bd. 2 735頁）と言う。一方で「魂はいつもまっすぐに存在の純真さにおいて神の中にある。」（エックハルト D. W. Bd. 2 736頁）と言う。神も魂も純真な存在ということであろう。そしてそういう謙遜な人間については、「神はそういう人間の中へ全く流れ込むことを神の善性においてしないわけにはゆかない。神は必然的にそうせねばならないように強制される。」（エックハルト D. W. Bd. 1 486頁）と言う。zwingen とまで言っている。こういう考えは神を超えて神性にまで至らなくてはいけないという考えと一体なのであろう。神さえも義とか善とかに対しては義務を負っているのであろう。神の存在よりもむしろ例えば善というようなことがいわば上位を占めているのであろう。だから zwingen ということになるのであろう。こういう神観は聖書的なのであろうか。確かに神は愛であるとか義であるとか言っているが、それはしかし神の存在が前提とされているからであろう。もっとも神にあっては強制と自由とは一と考えることもできるであろう。たとえそうであっても人は罪を避け得ないのにそういう人と神とがいわば相互透入というのは理解しがたいのである。さらに「真に謙遜な人間は神に命ずることができる。（中略）謙遜な人間と神とは一である。謙遜な人間は彼が自己自身を支配しているように神を支配している。」（エックハルト D. W. Bd. 1 486頁）と言う。神に命じたり、神と一であったりしている。こういうことでよいのであろうか。神は畏るべきもので知ることさえ許されぬという感覚とは全く異なっているのである。こういう考えの最たる面として、「一人の人間が真に謙遜であれば神はその全神性を失って完全に神性を放棄するか、あるいは自らを注ぎ出しその人間の中へ全く流れ入らねばならないであろう。」（エックハルト D. W. Bd. 1 486頁）と言う。謙遜には特別の意味があるにしても、それも罪を避け得ない人の態度であることに変わりはない。それに対して神がこのようなことをすると考えうるであろうか。我々日本人の神観念

のようにさえ思えてくるのである。いわゆる離脱によって神が私を愛するように強制できると考えるような考えはきわめて人間中心的な考えであることにはならないのであろうか。たとえ人間のあり方がどのようであれ、神は哀れもうと思うものを哀れみ、救おうと思うものを救うのである。神には主権がある。救いを求めるものを待たすこともできる。人とは隔絶したところがあればこそ人にとって救いの根拠となりうるのではないのであろうか。ただそういう人間中心的な考えは禪の立場とは合致しやすいのであろう。

さらに同様に、「根底に至るまで自己を捨てた人間の中へ神は自己をその全能力にしたがって全く注がねばならない。」(エックハルト D. W. Bd. 2 712頁)、「人が従順において自己の自我から出て、自分のものを放棄すれば神は *notgedrungen* に再びそこへ入ってこねばならない。」(エックハルト D. W. Bd. 5 505頁)と言う。ここでも必然的と言う。たとえ人が何をしようとも神が自らを完全にそこへ注がねばならないような人間は世に存在しないであろう。詩篇での陶工の例がある。もしそういうことが可能であればキリストの受肉は不要となるのではないのか。キリスト信仰ではなくなるであろう。また「自由な魂が正しい離脱のうちにある時には魂は神に神が存在するようにと強制する。そして彼はいかなる外形やすべての偶有性なしに存立しうるであろうならば彼は神の固有な存在を受け取るであろう。」(エックハルト D. W. Bd. 5 541頁)と言う。神固有の存在さえ受けると言う。これでは神と人との区別はなくなってしまふ。それぞれ固有でこそ名前がついているのである。さらに例の強制ということについて、「私が私を神へと強制するより、私が神を私へと強制することの方がはるかに優れている。(中略)神が自らをより迫力を持って私に従わせ、よりよく私と一致しうるからである。」(エックハルト D. W. Bd. 5 539頁)と言う。私が自己を神に一致さすより、神が自己を私に一致さす方が一致はより完全とは言いうるのであろう。そういう存在が果たして真に神なのか。さらに「我々を神は欠き得ない。我々が神を欠き得ないように。なぜなら我々が神から離れ得ぬであろうとすれば神も我々から決して離れ得ないであろう。」(エックハルト D. W. Bd. 2 644頁)と言う。神が人を欠き得ないというようなことがあるのであろうか。神は何度も人を滅ぼしているのではないのか。たとえイスラエルの民でさえも。また神と人との一致を意志という点から見て、「その意志を神に全く捧げている者に神は自己の意志を全く、本来の意味において神の意志が人間にとって自己のものになるように与える。そして神は自己自身において誓った、神はその人間が意志すること以外の何もできないと。」(エックハルト D. W. Bd. 2 639頁)と言う。人の意志すること以外のことを神ができないということまで神と人との間での一致を考えている。この引用文の前提として引かれている出エジプト32:11, 31以下でも神と人との意志は一致していない。だからこそ罰するということが言われているのである。一致していないことを言っている個所を一致する場合はどういう時かの推論に使っていることになろう。しかしそうなるそれはテキスト本来の考えではなくてエックハルトの考えということになろう。読み込みではないのであろうか。同様の事態を別の点

から見て、「もし我々が神に対してすべてを発見すれば神は我々に対して再び神の持っているすべてを我々に対して明らかにする。(中略) 何ものをも隠すことはない、知恵にしる、真理にしる、秘密にしる、神性にしる」(エックハルト D. W. Bd.1 474頁) と言う。神のさらにその奥にある神性さえも隠さぬと言う。神を直接は知り得ないというのでは全く異なる。啓示は不要となろう。

いずれにしても、いかに謙っている人間に対してとはいえ神が自己をそこへ注ぎ込む義務を持つ人間などありえないであろう。聖書のどこにそういうことが出ているであろうか。神と人との結合についてだが、西谷は「神と人との人格的關係においても、神の愛と言われる場合そこに常に恣意という意味が残る。エックハルトが語るのはかかる人格的關係をもこえた関係における恣意以上の意志、一種の意志的必然性についてである。」(第7巻14頁) と言う。神と人との間にそもそも必然的結合などありえないことである。キリストを信じている場合でさえも最後の審判があるのであるから。人格的關係であればこそそうであるほかないであろう。恣意というと悪く聞こえるが神の人に対しての恣意というのは聖なる意志である。神の側での主権なのである。それを超えることは固有な人格的存在としての神の否定に通じてしまうであろう。神と人との間の断絶を消す結果となってしまふであろう。そのことは結局人間の方へと跳ね返ってくる。そして人は罪と死とから救われなくなるであろう。神と人との二ということの消滅については「人間は神の業がそのうちに働く場所でもなくならねばならぬ。(中略) しかもそこにおいて彼は彼の永遠なる本質に達すると言われる。」(第7巻19頁以下) と言う。確かにイエス・キリストを啓示と信じ、救済史の中に組み込まれていると、神の働きが自己の働き、自己の働きが神の働きという側面は生じてこようし、また生じねばならない。しかしこのことと今すでに Einbilden において神と一であることとは異なる。前者では神自身とは二でありつつ、救済史の中での働きにおいては一である。二即一である。一即一ではない。罪ゆえにそうはなり得ないのである。しかし罪の逆効用であるのか人はそれで満足しうるし、またそうであるほかないのである。「神のみが神自身のうちに業作する時、やはり人間はその神のうちに没し去り、結局は神の業が彼の本質となるのであって」(第7巻20頁) と言うが、これはしかし逆に考えると神を今すぐに全面的に自己の側に取り込むこと以外の何ものでもない、自己が全くなくなるほどにまで今すぐ取り込まないと満足できないほどに自我一無我的であるとも言えなくもないであろう。神といっても知性であるとも言われているように自己にとって異質な要素が神に備わっていないのであろう。結局広い意味での自我の世界の中でのことということになろう。可視的世界の中の物事からの心の解放ということが言われるとしても、それ自体が自我の主張であろう。自我といっても悪事をするばかりではない。むしろ今の時点で全体的、完結的と当人の考えることを要求するか否かが自我の存否の基準になるのではないのであろうか。そういう究極的目標のある限りいくら可視的世界に属すものを捨てても自我を離れたことにはならないであろう。かえってますます自我は強化

されるであろう。最終的にはもはや何によっても阻害されないほどに強化されよう。しかしこのことは自我の否定ではない。外見上はむしろこちらの方がより自我が否定されているようにさえ見えるであろう。なぜならここでは可視的なものへと心が引かれることは少しも許さないからである。もしそんなことになれば究極的なものから落ちることになるからである。一方啓示信仰ではそういうことが一時的に生じても何ら支障はない。なぜなら自己の存立根拠はイエス・キリストという他者の側にあるからである。神の他者性を消せば消すほど人の救いは遠のくのである。

「神が神自身の働く場所であるほどに。」(エックハルト D. W. Bd. 2 730頁), つまり自らを空しくしてもなお空なる場所が残るのでは究極の貧ではないというエックハルトの言うことはパウロにも当てはまる。救済史の中に位置づけられて正に彼の心身の中で神が働く場所になっているのである。エックハルトでは救済史的性格はない。パウロでは神自身が彼に現前してはいない。キリストが現前している。それにもかかわらずあれだけの活動を為し得たのはキリストが神と一であると信じていたからであろう。終末においてさえも「顔と顔とを合わせて見るであろう」(コリント前書13:12)と言っている以上、神と人との二ということは維持されたままであろう。二では不十分で一でなくてはいけないという観念自体がないのである。このことは神が「わたしは、有って有る者」(出エジプト 3, 14) という神であるということとも呼応したことである。有らせられているものは神とは別のものである。神に相對しているものである。つまり二であるほかないのである。神の似像である人間の場合とくに二ということになろう。二が不十分という観念はないので不満もないのである。二は不十分、一が完全とは正に人が作り上げた観念にすぎないであろう。

こういうエックハルトの一面について、禪の立場から「人間は神がその中で活動することを得る場所でもなく、またそれを持っていないというほどに貧しくならねばならない」という言葉を引いて、これは単に魂の能力の浄化ではなくて魂そのものの浄化、自己透脱であり、それを実現するのが魂のうちにおける神の誕生だとする解釈が見られる²⁾。しかし神の誕生という以上積極的なものへと転じていて、神への信仰が根本に存していることが分かる。禪とは根本が違っている。またパウロでは人のうちでの子の誕生は選ばれた人間に限定されているが、エックハルトでは自己透脱した魂には神は必然的に誕生せねばならないと解されている³⁾。後者では誰でも自己透脱すれば神を強制できることになる。このことは神がその我性を失うことをも意味しているのであるが、神について我性ということを考えてよいのであろうか。

注

- 1) 川崎幸夫『エックハルトとゾイゼ』昭和61 158頁
- 2) 同上書 148頁
- 3) 同上書 150頁

参考文献

西谷啓治著作集 全26巻 1990~1996

Meister Eckhart Die deutschen Werke

第1巻 1986

第2巻 1988

第5巻 1987

Christianity and Standpoint of Nothingness

Kaoru NAGITA

College of Liberal Arts and Science for International Studies,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2000)

In Eckhart it means to know the real God that the god facing the created, the presentative god disappears. The living God is separated from the presentative god. The latter is rejected. On the contrary in the christian faith both of them are confirmed, because it keeps the history of salvation. But it is true also in the christian faith that the living God and the living self appear in one and the same activity.

It goes against the idea of the Bible that man and godness are one when man extinguishes oneself internally. Because God is absolute, man sinful.

In Eckhart man is free from sin, if we think that man's will desires nothing but God's will does. Such thinking resembles closely Hisamatsu's Zen, which is criticized in the way that there is no place of man's existence. Does it correspond to the Bible that the modest man compels God to flow into himself? How does it agree with the freedom of God as potter? How can we accept the sovereignty of God?